

## すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮

周路 著 李晴 訳

### 第2回 日本人の友人たちが高鳳蓮おばあさんを訪ねる

私は日本に滞在した2年の間に5回の個展を開きました。陝北の色彩や造形を使用した作品は、日本の人々に好評で、展覧会をきっかけに中国の民間芸術に興味を持つ人々とも出会い、友達となりました。

友人たちは私の作品を通して陝北の、風景や素朴な剪纸に興味を持つようになり、やがて、実際に陝北に広がる黄土高原へ行き、剪纸の作者に会ったり、そこに住む人々の暮らしを見てみたい、と言うようになりました。

延川県は黄土高原の中ほどにあり、今でこそ政治・文化の中心からは遠く離れていますが、かつては様々な民族による多種多様な民間の風俗・文化の揺籃の地だったのです。

1997年の旧暦正月、まだ外国人に開放されていなかった延川県は、初めて外国からの観光客を迎えました。黄土高原と陝北の民族芸術に関心を持つ日本人9人が、高鳳蓮さんの住む白家塬山に私の案内で訪ねたのです。

当時、閉そく状態の小さな村にいきなり沢山の日本人が訪れ、しかも同じ時に、北京のテレビ局も高鳳蓮さんと剪纸芸術をテーマにドキュメンタリー番組を作るためにやってきました。村の人々は大いに驚き、高鳳蓮さんの株が俄然上がりました。高鳳蓮さんの家は人の声で湧き立ち、窯洞の3つの部屋、庭の中、窯洞の屋根の上まで村の見物人で一杯になりました。

ちょうどその少し前に、北京で「世界婦女代表会議」が開催され、高鳳蓮さんの作品が会場を飾り、外国からの参加者や民間芸術の専門家から高い評価をうけたところで、私が《陝北四婆姨剪纸》を編纂したときからすでに5～6年が経ち、高鳳蓮さんの作品にはかなり大きな変化が生まれていました。作品の大きさは、以前のような手のひらサイズの小品が少なくなり、紙幅が広くなり、雄大さと勢いに溢れ、形ももっと個性的になりました。作品の内容も簡単な動物や草花、人物、十二支などから人類の祖先や昔の聖人、帝王、そして、彼女が住む村の人々の変わらぬ暮らし、喜び、幸福への祈りなどのモチーフへと変わり、これら全てを自分の作品の中に込めようとしてきました。高鳳蓮さんの作品を見ると目が眩み、興奮が抑えられなくなってくるほどでした。

日本の友人たちも高鳳蓮さんの作品の斬新さと奇怪、不思議さにとても興奮をしたようでした。さらに、剪纸を型紙にして自分で染めた色布を切り、貼り絵にした「布堆画」も友人たちの関心をおおいにそそりました。作品はすぐに売り切れたので、高鳳蓮さんの顔が嬉しさで綻び、その様

子を見ていた私もとても嬉しくなりました。その日、ほんの短い時間に得たお金は日々の労働から得る収入の何倍になるでしょう？ 日本の友人たちを延川に案内して、まず白家塬村に行くということは私が第一に考えていたことです。延川には実際には剪纸や布堆画の作品を作って売っている人が何人もいますが、その中でも私には真っ先に高鳳蓮さんが頭に浮かんだのでした。

黄土の地に住んでいる人間は先祖代々この地に生まれ、黙々と祖先から受け継いだ土地を耕し、変わらぬ暮らしを続け、死んでゆきます。そして、自らの心を癒す精神的な象徴をもまた先祖代々受け継いでゆきます。その精神的な象徴をもっともよく表す手段が剪纸でした。

\*婚姻・生殖崇拜；人間がどんどん増えることによってこの地に生きてゆけ、家族が続いてゆけるから。

\*神霊祭拜；神霊を祭るからこそ、家族の平安が守られ、病気も災難もありません。

\*龍王・君主崇拜；龍王を祭るからこそ、雨風順調で五穀豊かに実る。また、竈神と土地神を祭れば、どの家も家畜が増え、果物は熟して良い匂いが漂い、四季は春のように穏やかに…。

昔から、黄土高原に住んでいる人間は「人は天に従う」ということを守らなければ、よい時節に美しい景色が現れないかもしれないと思っています。

言うまでもなく、この種の文化は文字で書き表されたものではなく、代々人の口伝えや以心伝心で伝わって行き、人々の血液、細胞に深く染み込んでいるのです。そして人が形で表すときには、その人それぞれの生活体験や文化が反映されて、一致した形というものはありません。そんなわけで、剪纸は無文字で記載する民間伝統文化現象、つまり今の流行の言い方では「非物質文化遺産」として認定されました。

高鳳蓮さんには苦難の人生があり、紆余曲折の体験があったからこそ、心の支えを尋ねるときには、目の前が開け、潜在意識の下から、遙か昔からの、言い伝えられてきた、神々の、言葉としてははっきりと言い表せない姿形が現れ出てくるのです。まさにこのことが高鳳蓮さんを同年齢の人たちよりも一段上手にさせたのです。

同年の7月、日本の友人が再び白家塬にやってきました。今回は日本で「陝北民間剪纸展」を開くために、展示作品を補充するのが目的でした。



その時、友人は前回ここを訪れてからまだ半年も経っていないのに、こんなに沢山の作品があること、そしていくつかの作品の真偽について疑問を呈してきました。いまや私にもはっきりと高鳳蓮さんが金銭の魅力に惹かれたことがわかりました。友人の帰国後、手紙が来て、前回手に入れた作品と今回の作品を見比べていると、いくつかの作品に、図案は高鳳蓮さんのものに似ているが、全体にぎこちなく鈍重で雑な作りのものがあると言ってきました。ちょうどその頃から高鳳蓮さんの娘さんが剪紙の制作をはじめていたのです。お母さんよりは娘さんの剪紙に対する原動力はずっと低いものでした。このようなことが原因で日本の友人たちとの次回の交流計画は行き詰ってしまいました。

私は日本で展覧会を開こうとしている人たちを良く知っていました。殆どが家庭の主婦ですが、中国文化に深い関心を持ち、勉強会を開いたり、交流をしたりして自身の興味を深めている人たちです。その友人たちが開催した今回の展覧会は、陝北の旅で出会った剪紙という陝北の民間芸術の素晴らしさに深く感銘し、広く紹介したいと純粋な気持ちで開催されたもので、350点あまりが展示され、すべての費用はそれぞれが出し合い、成し遂げたのです。しかし、開催された展覧会の趣旨は高鳳蓮さんにどう説明をしても理解をしてもらうことは出来ませんでした。「お金を儲けるのでなければ何のためにここまでやってくるのですか？」

何回も北京で作品を発表し、高鳳蓮さんと娘さんの剪紙の値段が急に高騰しました。ある日、娘さんはかなり得意げに「母の作品が北京展覧会で大賞を獲得して、800元の値段で売れました。もうこれからはこういう値段でなければ売らなもりはないです。」と、私に言ったのです。これを聞いて私は本当に恥ずかしい思いがしました。それからは



日本で開催の陝北婆姨の剪紙展(高鳳蓮の作品の前で)  
1998年5月 於：町田市国際版画美術館市民展示室

もう高鳳蓮さんにも会っても剪紙の話をする勇気がなくなり、白家塬に行っても風景の撮影をしたり、四方山話をするだけになってきました。

確かに高鳳蓮さんの作品を見ると、太古の時代へ、神霊の世界へ、天の彼方へ導かれるような不思議な魅力があります。それは日々の暮らしの重苦しさに喘ぎ、より良い暮らしへの渴望が生み出す幻覚のようなものです。この感覚を全ての人が表現できるものではありません。だから、私はずっと高鳳蓮さんの豊富な想像力と創造力を尊敬して止まないのです。

高鳳蓮さんと付き合い、話して見ると、人として喜怒哀楽を感じ、普通の情と欲をもった、真面目でごく当たり前の陝北のお婆さんたちの一人だということが分かります。ただ、一般人よりは性格が気丈で、剛毅で、どこまでも負けを認めないという強さが特別と言えるかもしれません。この強さは、彼女の生活のあらゆる場面で見られます。これが私がずっと高鳳蓮さんと付き合いを続けている理由です。



黄河风情图 (90 x 180 c m) 90年代後期

高鳳蓮